

家族、支援者の立場から

# 認知症イノベーションと認知症バリアフリーの次の一歩

認知症の人と家族の会 和田 誠

♡はじめに

# 私たちが今、立っている場所

## 現場からの視点

認知症の人と家族を支える立場で  
見えてきたことをお伝えします

日本認知症官民協議会、認知症イノベーションアライアンス、認知症バリアフリー宣言、オレンジイノベーション。

これらの取組は非常に意義が大きく、ここ数年で「コアとなる仕組み・方向性」が形になってきました。

しかし今、私たちは「コアを創る段階」から「現場の日常を変える段階」への橋渡しが問われている重要な局面に立っています。

# これまでの取組がもたらしたものの

## 認知症イノベーション アライアンス

本人や家族の声を取り入れた商品・サービス開発の枠組みが整ってきました。  
企業・自治体・医療・介護など、多様な主体が同じテーブルにつく「場」としての価値が根付いてきた感じがしています。

## オレンジイノベーション

具体的な商品・サービスが誕生し、本人・家族の日常を支える実践的なソリューションが生まれています。

本人・家族と共に作っていくという理念が一部の取組みでは実装されている感じがしています。

## 認知症バリアフリー宣言

さまざまな業種が賛同し、手引きも整備され、方向性は共有されてきています。  
「認知症になっても行きやすい店・サービス」が少しずつ増えてきたという実感があります。

コアな仕組み・ガイドラインが固まった今、次は”量と深さ”をどう広げるか。

## 支えながら、揺れながら

“  
できる限り自  
宅で、その人ら  
しく暮らしてほ  
しい  
”

“  
怒りたくないの  
に、ついきつく  
言ってしまう自  
分が辛い  
”

認知症の家族を支える人は、愛情と罪悪感が同居する複雑な思いを抱えながら生活しています。

中等度～重度の介護は24時間型で、先が見えにくい。

家族自身の仕事、健康、生活、他の家族との関係にも大きな影響が及びます。

それでも「一人の暮らし・人生を支えているのだ」という誇りを持って頑張っている家族が多いのです。

# 家族から見た現実の課題

## 情報の届かなさ

サービスや制度、認知症基本法、バリアフリー宣言などの”仕組み”があっても、「どこに、何を、どう相談すればいいのか」がわからないまま、限界まで抱え込んでしまう家族が少なくありません。

## 認知症基本法の認知度

法律は施行されましたが、介護職・医療職でも内容まで理解している人は多くありません。家族はなおさら「名前は聞いたことがあるが、何が変わるのかわからない」という声が多いのが現状です。

## サポーターの見えにくさ

認知症サポーターは1,600万人を超えますが、その存在や活用方法が見えにくい。「近くにサポーターがいるなら、一緒に買い物に付き添ってほしい」「少しだけ話を聞いてほしい」など、身近な支えにまでつながっていません。

# 「届いていない距離」をどう埋めるか



仕組みは整ってきました。  
しかし、それを必要としている人たちの日常に届ける「最後の一步」が課題となっています。

# 課題の詳細分析

01

## 認知症基本法の「現場への翻訳」不足

法律には当事者の意思決定支援や共生社会の実現など、家族にとっても大きな意味を持つ理念が盛り込まれています。

しかし、介護・医療の現場で「具体的に何が変わるのか」、家族にとって「どんな支援につながるのか」が十分に伝わっていません。

困っている場面別(夜間の徘徊、食事、入浴、金銭管理など)に「落とし込んだ”生活現場版の説明”」が必要です。

02

## 認知症サポーター 1,600万人の「眠っている力」

これだけ増えたこと自体は世界的にも大きな成果です。しかし家族から見ると、「どこにいるのか、何をお願いしていいのかわからない」「実際の暮らしのどの場面で頼っていいのかわからない」状況があります。施設や地域行事の「顔の見える支え手」として、家族介護者の「話し相手」「小さな手助け」として、もっと具体的な役割に位置づけることが求められます。

03

## オレンジイノベーション商品の「流通と情報」の壁

当事者の声を生かした良い商品が生まれているのに、認知症の人・家族・支援者はその存在を知らないことが多い。「こんな商品があるなら、もっと早く知りたかった」という家族の声も多いのです。福祉用具事業者のカタログ、ケアマネジャーが使う情報集、認知症カフェや家族の会の講演会やイベントでの展示など、家族が実際に目に触れる場所での情報発信が不足しています。

# 【ご提案】

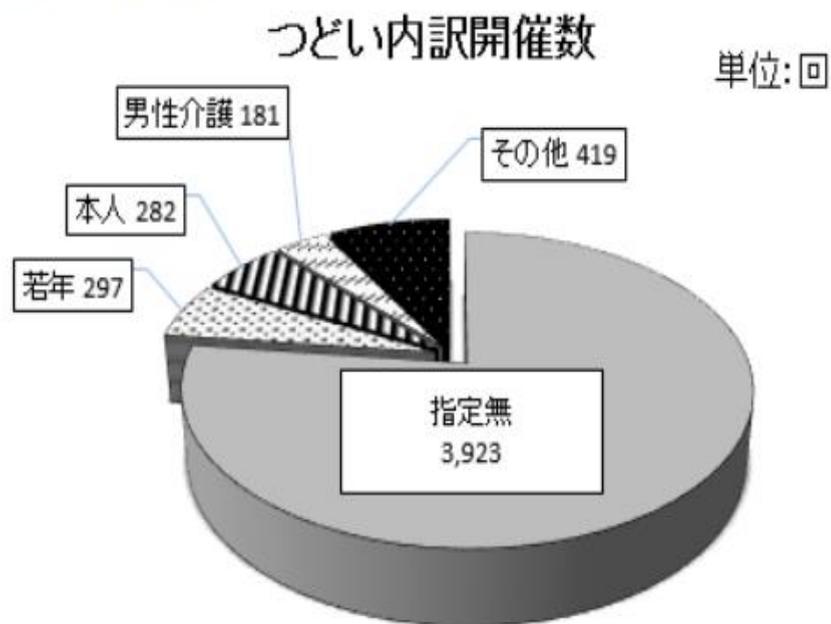
## 公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会) の活動を、認知症社会の既存インフラとして 活用することのご提案

### ※全国での「つどい」「本人ミーティング」の開催回数、参加人数

全国のつどいの状況(2024年度)

2024年度内訳別開催数

開催数(回)	5,102
指定無	3,923
若年	297
本人	282
男性介護	181
その他	419



※その他には単身介護者、看取り対象などが含まれています。

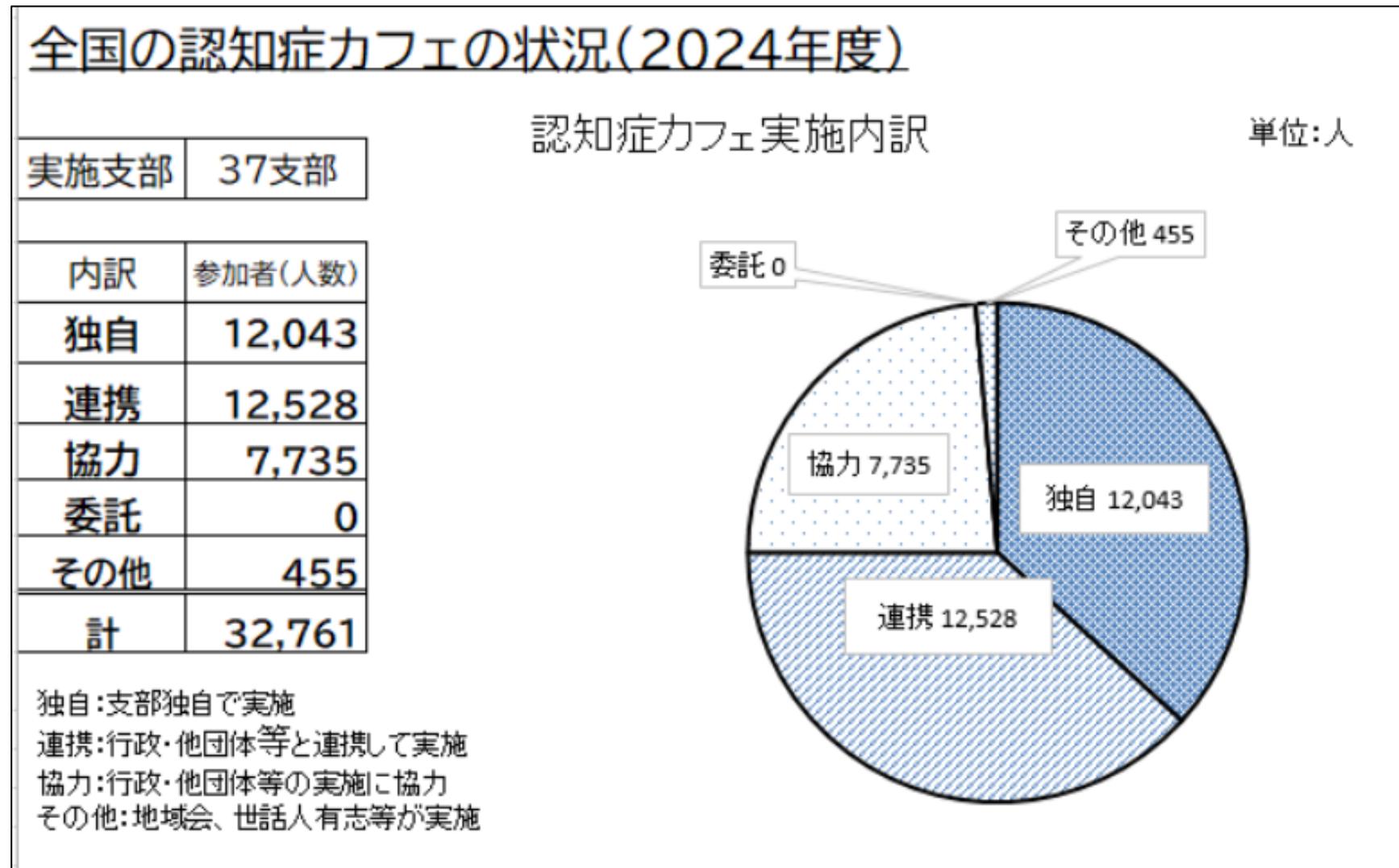
2014年度～2024年度の参加者数の推移

年度	参加者(人数)
2014	49,728
2015	52,115
2016	53,567
2017	53,089
2018	57,065
2019	50,277
2020	26,814
2021	27,906
2022	31,836
2023	45,561
2024	48,939



【ご提案】 公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会)の活動を、  
認知症社会の既存インフラとして活用することのご提案

※全国での「認知症カフェ」の開催回数、参加人数



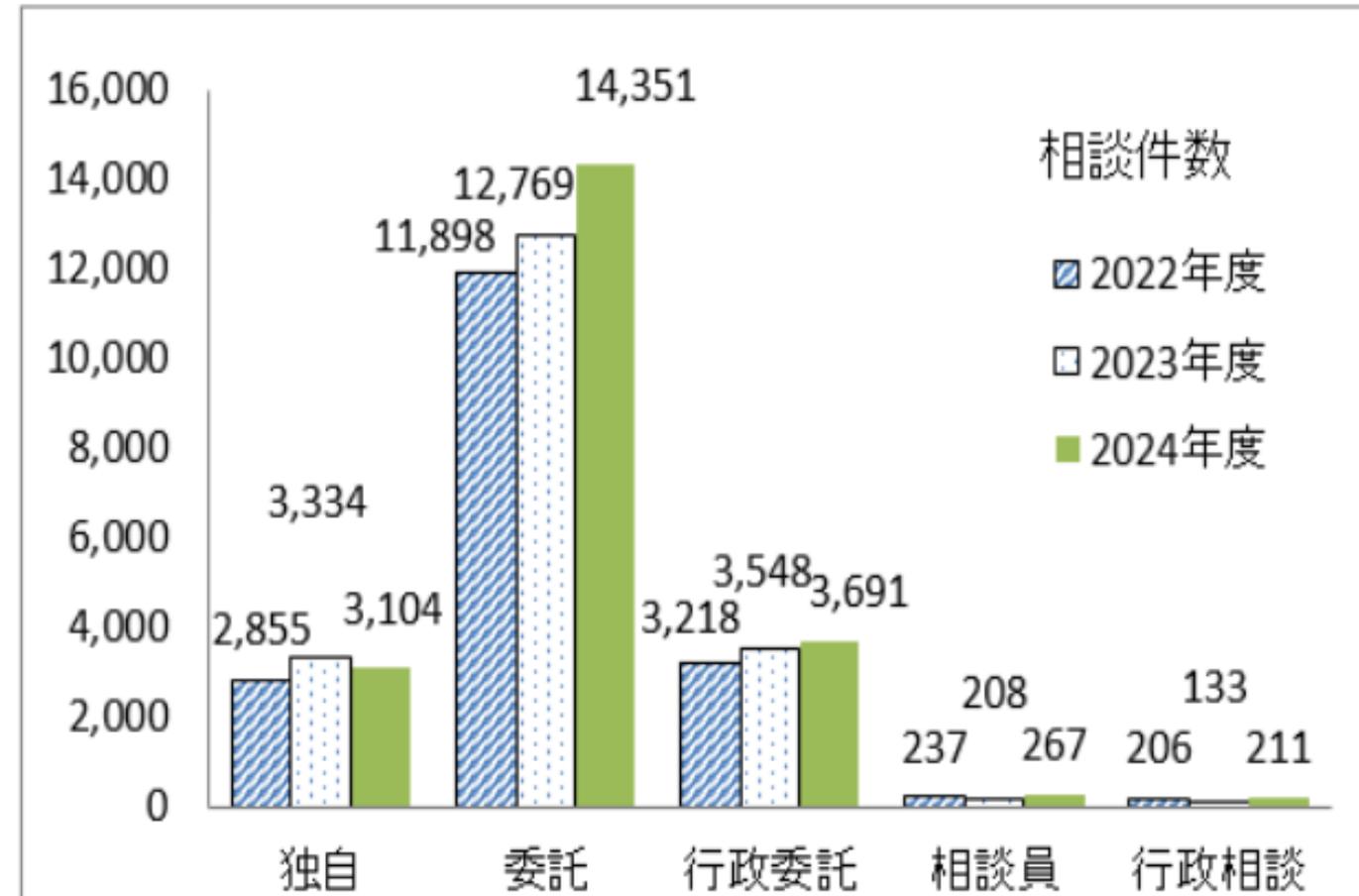
【ご提案】 公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会)の活動を、  
認知症社会の既存インフラとして活用することのご提案

※全国での「認知症コールセンター事業」への相談件数

公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会:AAJ)年間活動実績より

相談件数 (延べ) [件数]

	2022年度	2023年度	2024年度
独自	2,855	3,334	3,104
委託	11,898	12,769	14,351
行政委託	3,218	3,548	3,691
相談員	237	208	267
行政相談	206	133	211
計	18,414	19,992	21,624



これとは別に本部コールセンターへは2024年度2,454件の相談が寄せられています。

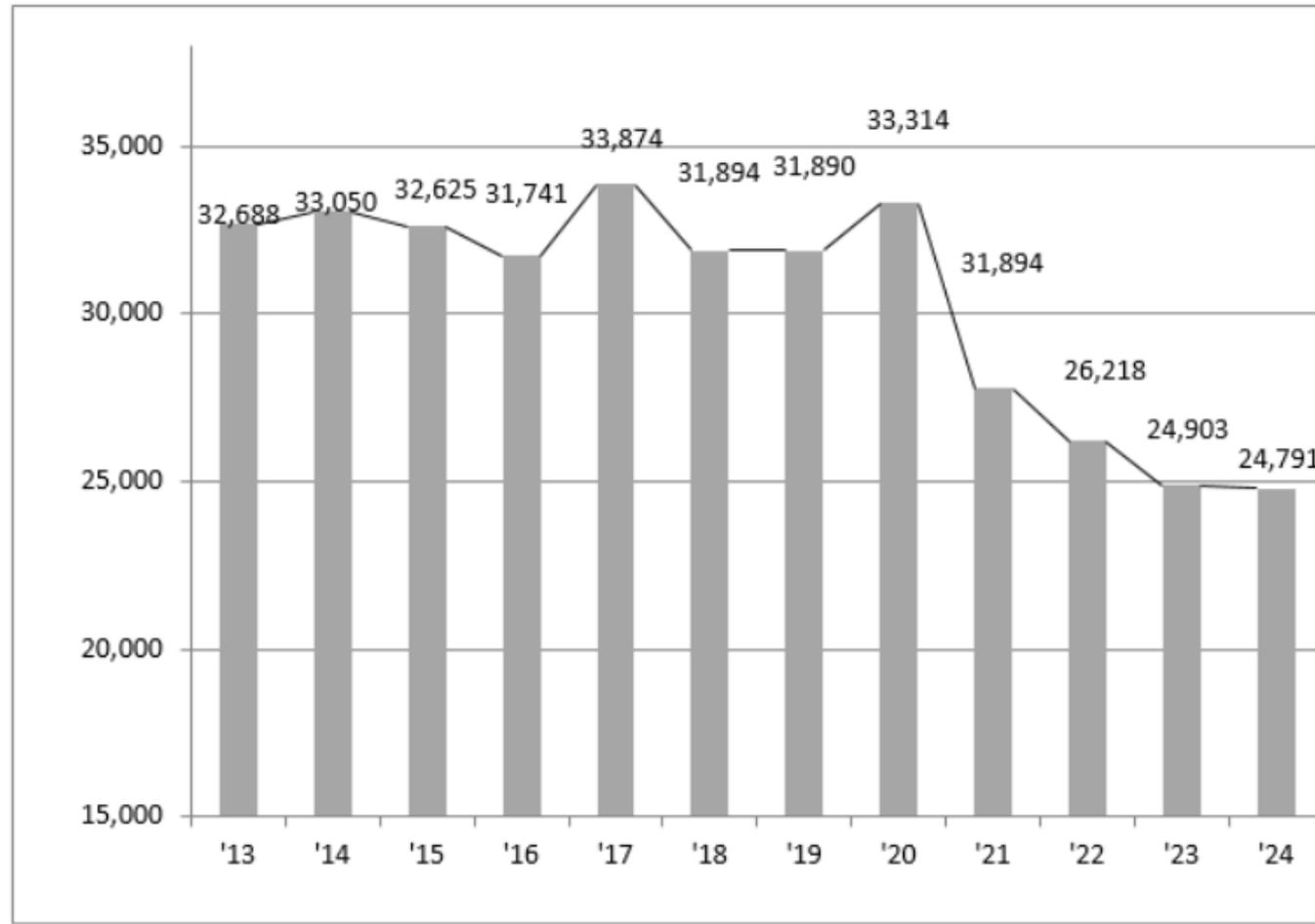
# 【ご提案】公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会)の活動を、 認知症社会の既存インフラとして活用することのご提案

## ※会報の発行部数、ホームページへの訪問者数

公益社団法人 認知症の人と家族の会(日本アルツハイマー病協会:AAJ)年間活動実績より

支部会報発行部数の推移(2013年度～2024年度)

年度	支部会報発行部数(部/1回)
'13	32,688
'14	33,050
'15	32,625
'16	31,741
'17	33,874
'18	31,894
'19	31,890
'20	33,314
'21	27,785
'22	26,218
'23	24,903
'24	24,791



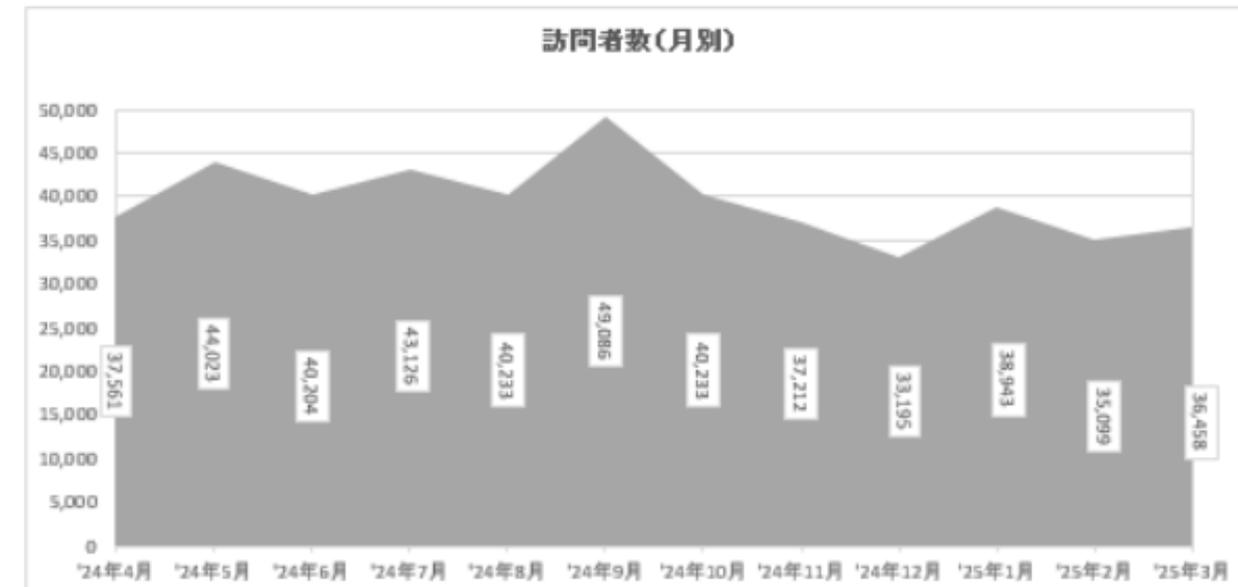
本部ホームページ 2024年度 ページ別訪問者数('24年4月～'25年3月)

ページタイトル	訪問者数
1 認知症をよく理解するための9大法則・1原則	35,065
2 全国もの忘れ外来一覧	34,664
3 全国もの忘れ外来一覧(東京都)	23,061
4 No.9-不利なことを認めない	21,161
5 電話相談	18,806
6 支部	18,552
7 父は認知症で要介護1です。デイサービスを嫌がります。	13,111
8 介護者のたどる4つの心理的ステップ	13,017
9 「認知症」早期発見のめやす	12,570
10 全国もの忘れ外来一覧(近畿)	12,497

※トップページ(83,810件)、認知症子供サイト(133,351件)を除く

本部ホームページ 2024年度 訪問者数の推移

▼2024年4月～2025年3月



# 希望を持って、共に創る未来へ

これまでの取組により、認知症イノベーションアライアンス、認知症バリアフリー宣言、認知症基本法という、しっかりしたコアは整ってきました。

これからの課題は、認知症の人と家族の日常の暮らしに、そのコアをどう届けるかです。

認知症になっても、そして認知症の人を支える家族も、誰もが一人で抱え込まず、希望を持って暮らし続けられる社会を、ここに集う皆さまと共に創っていきたい。